

ネットワーク型基幹研究プロジェクト 地域研究推進事業 「グローバル地域研究推進事業」基本計画

令和4年4月1日
人間文化研究機構

【プロジェクトの概要等】

① プロジェクトの概要

政治、経済、社会、文化などさまざまな面でのグローバル化、ボーダーレス化が進む現代世界にあって、既存の「地域」にのみ注目して当該地域の基本的性格や構造を解明する研究は最早成り立たなくなっている。その一方で、新たな形でのナショナリズムの高揚や地域の固有性の再発見や再創造といった動きも活発化しており、これがグローバル化のあり方にも大きな影響を与えるに至っている。

これまでのグローバル化の捉え方の前提には、地域の外から「市場化」や「民主化」等のグローバル化の諸力が加えられ、地域が従属的にその諸力によって変容させられているという暗黙の認識があった。しかし、上記の通り、グローバルに連関しあう経済や政治のあり方自体が地域の側から変容させられ、問い直される状況が生まれている。今後の地域研究は、このグローバルと地域の相互の動態的関連性の解明を行う必要がある。

また、このような動態の下で、コロニアル/ポストコロニアル時代とは異なる空間連関が生じ、従来とは異なる地域性も生じつつある。こういった動きを見据え、新しい地域性や地域像を探り、状況の変化を正しく認識することは、日本が自らの将来展望を考える上でも不可欠の作業といえるだろう。

そこで、これまで主にポストコロニアルな世界認識の下で想像（創造）された地域それぞれの固有性を内在的・本質的に明らかにすることに注力していた地域研究を刷新し、グローバル秩序の構築（とその失敗）と変容のメカニズムを、諸地域の比較と関連性という視点から明らかにする「グローバル地域研究」を推進する。このもとで、ポストコロニアルな地域像を越える地域研究も模索する。

この目的を達成するため、新しい地域研究として「グローバル地域研究」プログラムを立ち上げ、そのもとに「グローバル地中海地域研究」「環インド洋地域研究」「海域アジア・オセアニア研究」「東ユーラシア研究」の4つの地域研究プロジェクトを設置して、ネットワーク型の地域研究を推進する。4つの地域は、それぞれの占める空間の環境特性、環境に適応した生業や生活様式、それらに根差しつつ形成された統治や経済の態様などを規定要因として長期的に独自の文化・文明を形成してきた。4つの研究プロジェクトはそれぞれの文明圏域の長期的持続と現代における展開の解明を独自の視点から推進する。またこれと同時に、これら圏域間のヒト・モノ・情報・価値の移動と交流による諸関係の様相を、総括班としての機能を果たす「グローバル地域研究」プログラムと協働しつつ解明し、開かれた関係性の中に形成される「地域」と「グローバル」像の動態を把握してゆく。

② プロジェクトの統括、運営体制

(1) 「グローバル地域研究」総括班の構成と機能

4つの地域研究プロジェクトの代表と副代表に加え、地域研究を幅広く見通せる研究者複数名で「グローバル地域研究」総括班を構成する。総括班の運営は、4つの地域研究プロジェクトの総括代表の互選で選出する総括班の代表が行う。また総括班の運営を支えるために若手研究員を雇用する。総括班の事務局は国立民族学博物館に置き、若手研究員も同館に配置する。機構の研究戦略との整合性や連携を図るため、総括班の会議には必要に応じて機構の理事にオブザーバーとして出席を求める。

総括班は拠点ネットワーク型で進められる4つの地域研究プロジェクト相互の調整を図ると同時に、共通テーマ研究に基づくシンポジウムを企画したり、プロジェクト間連携研究事業を主導したりすることを通じて、グローバルと地域の相互関連の動態の解明に取り組む。また、必要に応じて特別研究班を構成してプロジェクトの下におき、新しい地域像の構想に取り組む。さらに「グローバル地域研究」プログラム全体の成果発信、国際連携事業、社会連携事業、若手育成事業などを4つの地域研究プロジェクトと相談しながら、行ってゆく。

(2) 各地域研究の構成と役割

4つの地域研究プロジェクトの研究事業はそれぞれ国内の大学や研究機関のネットワークによって行う。それぞれのプロジェクトの全体テーマをブレークダウンした研究テーマに沿って複数の拠点を設ける。拠点となる大学や研究機関とは機構が協定を結び機構と共同して研究を推進する。各拠点には拠点代表を置く一方、当該テーマの研究推進を支えるため若手研究者を配置する。この若手研究者は機構が雇用し、各拠点に派遣する。各地域研究プロジェクトにはそれぞれのネットワークを総括する代表を置く。総括代表のいる研究拠点を中心拠点とする。

各地域研究プロジェクトの研究事業予算配分額は「グローバル地域研究」総括班が決定し、プロジェクト内の予算配分はそれぞれの地域研究プロジェクト内の協議に基づいて行う。

各地域研究プロジェクトはそれぞれが海外研究機関との研究協力協定の締結、国際シンポジウム等の積極的な開催等を通じ、国際化を図る。また成果の一般社会への発信にも努める。国際化や一般社会への発信の方策については「グローバル地域研究」総括班も積極的に助言等を行う。

③ 研究テーマ・役割

【グローバル地中海地域研究】

本研究プロジェクトの主要な目的は二つある。第一に、地中海を取り囲む諸国を、北は「ヨーロッパ」、南は「中東・北アフリカ」として分断する既存の地域研究の枠組みを脱構築し、「地中海地域」としての歴史的・文化的な関係性を包括的にとらえるアプローチを探求すること。第二に、地中海は内海であるものの、西に航海すれば大西洋の先にアメリカ大陸、南東のスエズ運河を經由して紅海から東アフリカやインド洋と繋がっている。また、シルクロードをたどると中央アジアに到着する。本プロジェクトは、大航海時代から現代までの地中海を介したグローバルな人・モノ・知識の往来について、文学、歴史学及び文化人類学を主要なアプローチとし、相互連携しながら共同研究を進めていく。超地域的かつ学際的アプローチを援用して考察することで、新しい地域研究の構築を目指す。

- ・ グローバル地中海・国立民族学博物館拠点（中心拠点）

本拠点の目的は、人とモノが移動することにより特定の空間を切り取られて「地域」として想

起される契機や仕組みを考察することにある。17世紀の大航海時代以降にみられた科学技術の発展により、人とモノ、情報のモビリティは格段に向上し、グローバル化という現象をもたらした。文化人類学と歴史学では、移民や交易に関する研究の蓄積はあるものの、移動が地域を形成する役割については十分に検証されているとは言えない。陸海空におけるモビリティを包括的にとらえることで、時間や空間が領域化する様相を動的にとらえる方法論を探求する。

・グローバル地中海・東洋大学アジア文化研究所拠点

本拠点の目的は、「イメージ/表象」の形成過程の系譜や歴史的変遷、現代的な動態を考察して、地中海が「地域」として意識されるようになった経緯を明らかにすることにある。具体的には西欧諸国が抱いて構築してきたオリエンタリズム的・他者的な地中海の言説と、地中海沿岸に属する非西欧諸国たるバルカン半島諸国とトルコから北アフリカにかけてのイスラーム諸国が自画像として築き上げてきた地中海の実態との関係性とを、文化人類学・歴史学・文学・芸術・観光学・ポピュラーカルチャー研究など多角的な手法に基づき具体的に解明する。

・グローバル地中海・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点

本拠点の目的は、ジャンルを越えた広義の文学・芸能がもたらすグローバルな文明圏間の文化の環流を明らかにすることにある。特に、地中海の東岸・南岸に広がったアラビア語文化が、遠く離れたアジアやアフリカの文明圏にどのように伝播したか、ペルシア語やテュルク語、インドやアフリカ、東南アジアや中国の諸言語に翻訳され、新たな表現形態を獲得したか、また、逆にこれらの文明圏の言語文化がいかに地中海文明圏に取り込まれたかを問う。そして、特定の言語で表現された文学や芸能が、文明圏や共同体の形成において担う役割について検証する。

・グローバル地中海・同志社大学拠点

本拠点の目的は、歴史的に構築された西洋と他者の関係性が、現代の移民受入国が直面する「共生の危機」に及ぼしている影響を解明することにある。一般に近代世界はルネッサンス期に遡ると言われるが、当時のヨーロッパにおけるギリシャ・ローマ文明の再発見は、レコンキスタやユダヤ人追放令を経て、イスラム教やユダヤ教の文化的影響力が忘却されていくプロセスでもあった。本研究では、このような歴史を通じて確立された「西洋至上主義 (Western Supremacy)」のイデオロギーが、現代の排外主義や人種主義、植民地主義、多文化主義へのバックラッシュなどに及ぼしている影響を究明し、このようなイデオロギーを乗り越える理論的枠組みの構築を目指す。

【環インド洋地域研究】

本研究プロジェクトでは、地理的なインド洋とこれに接する陸域に焦点を合わせつつ、そこを行き交うヒトやモノ、情報、カネ、文化、信仰の移動の拡がりや、この世界内外での様々な関係性の生成・発展・蓄積あるいは消滅に関わってきた動態を解明する。このことを通じ、環インド洋世界という新たな地域設定とその研究に資する分析手法を確立し、地域研究に新たな展望を開く。より具体的には、①移動の連関性と連続性、②文学と思想の混交性と創造性、③開発と環境、医療の持続性、④平和的共生の可能性の4つのテーマを設け、それぞれを担当する4つの拠点が研究を実施していく。さらに研究の進展に応じ、テーマをまたぐ研究会を組織するなどして、テーマ間の連携を深め、部門全体の研究目的の達成をめざす。なお、国際発信力を高めていくため、国内外の類似

のテーマを掲げる研究所や組織を結束させるコンソーシアムを組織し、この分野の研究の国際ネットワーク化を主導する。

・国立民族学博物館 環インド洋地域研究拠点（中心拠点）

国立民族学博物館拠点では、「移動の連関性と連続性」の解明をテーマに掲げる。具体的には、インド洋世界の重要な構成要素であるヒトやモノ、情報、カネ、文化、信仰の移動に着目し、移動そのものと、それらの移動が促す多様な位相（社会、文化、個人）における変容とに着目し、それらが相互にどのように作用し、何を育んできたのかという連関性と、移動の時空間的な連続性の解明を過去2,000年単位の時間幅を対象に行う。この問題に人類学、歴史学、建築学、物質文化研究などの知見を糾合させ接近することで、インド洋世界の実態を移動という観点から明らかにするとともに、その分析手法を確立することで、本研究部門の目的達成に貢献する。

・大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻 環インド洋地域研究拠点

大阪大学拠点は「文学・思想の混交性と創造性」をテーマとし、環インド洋地域を中心に、文学や思想、あるいは映像作品等が伝播されることによって、語彙や文体だけでなく、主題や思想がいかに広まり、共有されたか、あるいは反発を受けたかを明らかにする。環インド洋世界、すなわち東南アジアから南アジア、アフリカにわたる地域で生起する文学や思想の混交性に着目し、その通時的展開に留意しつつ、以下の問題に取り組む。①環インド洋地域における文学や思想の受容・現地化プロセスもしくは反発に関する比較を通じた解明、②現地で新たに生まれた文学や思想の実態解明、③文学や思想の現地化が引き起こす現地社会の文化変容に関する実態解明。これらの研究を通じ、文学・思想の面から「環インド洋」地域の多中心性、多孔性を明らかにする。

・東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 環インド洋地域研究拠点

東京大学拠点では、開発、環境、医療を主要テーマに掲げる。現代的な課題を整理しつつ、地域性とテーマ性に通底する要素やその関係性を洗い出し、体系的かつ総合的な視座を構築することを目指す。現代的課題として見通しているのは、環インド洋地域に根差した①持続型生存基盤の模索、②都市化及び資源・環境問題、③身体・生命に関わる知の形成・循環と人類社会の再生産である。環インド洋地域と関わる社会の諸事例を検討しつつ、学際的観点とグローバルに起こっている政治経済や文化の流動性を加味しながら、これらの課題を捉え直す視座を確立する。

・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属環インド洋地域研究センター

京都大学拠点では「平和的共生」をテーマに民族・宗教対立が頻発し経済的・社会的格差も広がる環インド洋地域において、地域の人々がどのように平和的に共に生きることを模索してきたのかを学際的なアプローチを用いて明らかにする。そこでは地域文化に根ざした紛争解決の方法、難民の受入れ、多様な労働の形態、より倫理的で相互扶助的な経済関係を分析するとともに、国民国家の枠組みにとらわれない開発援助や政治運動のあり方の可能性とその限界を考察する。

【海域アジア・オセアニア研究】

両地域をつなぐ共通項は「海域世界」であり、本研究はこの「海域世界」を軸に陸域よりも海の視点に比重を置く地域研究を試みる点に大きな特徴がある。陸域に基づく国家や東アジアや東南アジア、オセアニアといった従来の地域概念によって分断されがちな地域研究ではなく、海域とい

う視点を強調することで、東アジアや東南アジア、さらにはオセアニアといった複数の地域を同時に対象とできるような新たな地域研究の実践を目指す。本研究プロジェクトは「海域世界における島嶼環境と人類による文化・社会間の変容動態の探究」という共通目的の下に、(1) 対象地域を「オーストロネシア」語族圏としての基層文化的な共通性が根底にあることを認識しつつ、(2) 現代における海域アジアからオセアニアにおけるヒトやモノ、情報をめぐる越境的な動き・ネットワークに関わる総合的な把握を試みる。

・国立民族学博物館 海域アジア・オセアニア研究拠点 (中心拠点)

海域アジアやオセアニアの島々における開発の波は、人々の生業を大きく変化させ、多くの文化遺産の破壊にも直結しているほか、地域社会の伝統や文化変容においても大きな影響を与えつつある。本拠点では、島嶼世界で進むインフラ開発や資源開発に対し、その影響を直に受ける(1) 農業や漁業といった生業活動の変化やその動態に注目するほか、(2) 開発による影響を直接的に受ける遺跡や文化遺産の保護や観光資源化の問題、(3) グローバル化や開発への抵抗としても活発化する文化復興やアイデンティティの再認識化といった動きについて、その歴史的動態と現状を明らかにする。

・東洋大学アジア文化研究所 海域アジア・オセアニア研究拠点

海辺は津波等の自然災害による被害を被りやすい。しかしアジア・オセアニアの人びとは、古来このニッチに生活の場を築き続けてきた。それは、かれらがこのニッチに、独自の社会文化的意味を見だし、同時に罹災後の不確実な状況に対処していく力、レジリエンスを確保してきたからにはほかならない。本研究では、アジア・オセアニア海域を対象に、海辺居住の意味とそこで人びとが確保してきたレジリエンスのあり様を明らかにする。最終的には、同海域で人びとが紡いきた在地の復興の論理を地域間比較を通じて提示することを目指す。

・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 海域アジア・オセアニア地域研究拠点

低開発に由来する食料・健康問題がある一方で、近代化以降に肥満・糖尿病など非感染性疾患が世界最悪の地域である。さらに海面上昇と移住政策など、人々は大きな変化に直面している。本拠点は「食と健康の文化」をテーマとし、国や地域を超えた文化・ヒト・生態環境の総合的・地域研究から(1) 島固有の文化と海を通じた文化伝播、(2) 多様な環境と多彩な身体的・生理的・文化的進化、(3) 気候と社会の変動への文化による適応の解明を目的とする。食と健康を通じて人々が幸福(ウェルビーイング)に生きていくあり方を示す地域研究を展開する。

・東京都立大学人文科学研究科 海域アジア・オセアニア研究拠点

海域アジア・オセアニアは、歴史的に人、モノ、金、情報の相互交流が盛んな地域であったが、21世紀に入りその傾向がますます強まっている。本研究拠点は、「島嶼世界における人とモノの流動性」をテーマとし、特に近現代を対象として、(1) 東アジア・東南アジア・オセアニアを跨ぐ人の移動、(2) 移動民がもたらした文化・経済・環境への諸影響、(3) 現地社会の生活の変化、(4) 商品や景観などにみる流動性の物質的現れの調査と解明をおこなう。それにより、太平洋島嶼世界における流動性を歴史と実態双方の観点から捉え、同地域におけるコンフリクトの所在をつきつめると同時に、共生に向けた応用実践の可能性を模索する。

【東ユーラシア研究】

本プロジェクトの目的は「東ユーラシアの文化衝突とウェルビーイング」の解明である。ここで

いう東ユーラシアは中国とロシア及び隣接するモンゴル・朝鮮半島・日本を中心として、その隣接するないし関与する広域というゆるやかな地域概念である。事業目的は巨大国家である中国とロシアを抱える東ユーラシアの存在がグローバル世界に及ぼす影響力を、文化の衝突とウェルビーイング（幸福感）という視点で捉えようとすることである。政策や国際関係、経済のグローバル化を踏まえながらも、中国・ロシアおよびその隣接国家に暮らす人々に焦点をあて、彼らの行う宗教、文化、経済、政治などにかかわる活動が、いかなる文化衝突を引き起こし、また共生を生み出したのか、近現代史的背景を踏まえながら展開の実態を明らかにする。そこで基軸となる問いは、異なる文化的背景をもつ個人・集団が遭遇・交流することでどのような問題が発生し、解決されたのか（されなかったのか）、さらに彼らの幸福実現にむけた希望の社会的文脈を明らかにすることである。

・東北大学東北アジア研究センター拠点（中心拠点）

マイノリティの権利とメディア

ロシア・中国・日本などの先住民や民族的マイノリティの権利をめぐる動態に焦点を当てる。彼らが伝統的に暮らす地域は気候変動や経済開発等によって影響を受けているが、一方で先住民は国連など国際機関の政策決定にも影響を及ぼす存在であり、先住民族や少数民族同士が国家を越えて連帯している。こうした動向のなかで果たす映像をふくめた様々なメディアの役割を明らかにすることで、大国の主流派から排除されたマイノリティが作り出すグローバリズムを明らかにする。

・国立民族学博物館東ユーラシア地域研究拠点

宗教とサブカルチャー

宗教やサブカルチャーが政治経済秩序とは異なる局面でグローバルな関係性の中でどのようにして人々の希望を作り出している点に焦点を当てる。とりわけ旧社会主義圏においては、圏外に拠点を置く制度宗教や旧西側由来のニューエイジ思想、サブカルチャーといった「グローバルな文化」との接続が90年代以降であったという点が特徴的である。中国においても改革開放以降に外来の宗教や文化と接続した点で共通している。こうしたポスト社会主義圏を中心とした東ユーラシアにおけるグローバル化のタイムラグを背景に当該地域の人々が、新たに生み出された文化によっていかなる幸福感と文化衝突が生じているのかを明らかにする。また比較のために中国・旧ソ連圏以外の東南アジアの事例も入れるものとする。

・神戸大学国際文化学研究推進センター東ユーラシア研究拠点

少子高齢化と葛藤

東ユーラシアにおける少子高齢化の進行とそれに起因する社会的紛争に焦点を当てる。近代以降の東ユーラシアでは近代の人口増加が移民の主なプッシュ要因であり、これを背景に植民地支配・ナショナリズムに係わる民族的紛争が起こった。ところが今日、少子高齢化による人口減少は移民・移住労働のプル要因となり、域内外の多文化化を促進するとともに、歴史的背景を引きずったまま、新たな葛藤の原因になりつつある。東ユーラシアに見られる人口減少・高齢化と多文化共存の特徴を解明する。

・北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点

越境とジェンダー

ボーダースタディーズにおける境界付け（bordering）と空間に関わるスケールジャンプな

どの手法を援用し、観光や就労、人身売買等を含めた域内外への人々の移動に焦点を当てる。移民の受け入れと送り出しは世界各地で生じている現象だが、一帯一路構想のもとで、アフリカや北極域までの移動・移民する中国と、ロシアに流入する移民展開を追うと同時に、性差による分業やジェンダー規範のグローバル化等の視点を踏まえて、その場に暮らす人々の生活の視座からそれぞれの地域（コミュニティ）のあり方を解明する。またコロナ禍（ポストコロナ禍）における人とモノの移動を検証し、地域のあり方も展望する。

④ 期待される学術的研究成果とその学術的・社会的意義

従来の地域研究は、1) 前世紀半ばまでに確立した地政学的条件を基礎とする地域枠組みを前提に、2) 当該地域の本質的な固有性を固定化した地理的境界の中で内在的に理解しようとするという2つの点で近代主義的な知の営為を踏襲するものであった。これまでの地域研究が、現地の言語を駆使した長期滞在調査による実証性を担保しつつ、学際的な共同研究を実施することで多くの成果を上げてきたことは言を俟たない。しかし、地球社会におけるアクターやアクター間の関係が急速に変化を遂げ、国家・国民・共同体など従来の世界秩序を構成してきた概念自体が問い直される事態にある今日、前世紀的な知の枠組みに基づく地域研究の射程には限界があると言わざるを得ない。

本研究プログラムは長期現地調査や学際性といった従来の地域研究の特性を継承しつつ、人類史を俯瞰する観点から地域を設定し直し、グローバルな相互関連性や比較の観点を常に保って、それぞれの地域が直面する格差、抑圧、紛争、貧困、病と健康、環境破壊などの課題にアプローチする。新しい地域設定のもと、流動性と関係性の相において実証的・学際的研究を推進することにより、地域研究の基本概念や方法論の刷新をめざす点に本研究プログラムの最も大きな学術的意義がある。前世紀的な概念を超える地域設定の試みは既に世界各地で試みられているが、それを全地球的規模で展開し、地域間相互の関係を見通すプログラムは世界的にも類例がない。その意味で「グローバル地域研究」プログラムは革新的であり、世界の地域研究をリードする研究である。

研究の成果はプログラムに参加する研究者が個々に論文や単著等で発信するほか、毎年度本プログラムの各レベルで実施される国内/国際シンポジウムやこれに基づく論文集によって多言語で公開される。長期的視点に立ちつつ、新しい地域概念と方法論によって今日的課題にアプローチする研究成果を公開することで、専門的研究者はもとより一般社会に正確な世界認識の基礎を提供し、現代世界が直面している課題解決への展望を開くことが期待できる。

拠点ネットワーク型で展開される本研究プログラムでは10の大学及び1つの研究機関が拠点となり、この数倍の大学に所属する160名近い研究者が共同研究者として参加する。研究協力者として参加する研究者はさらにこの数倍に及ぶ。第4期中期目標期間を通じ持続的に多数の大学、研究者がネットワーク型連携を維持し、学際的に共通の研究課題に取り組むことは日本の人文社会科学の学術体制の活性化にも大きく貢献する。また問題意識を共有する多数の海外の研究者が招聘され、プログラムの各レベルの研究会やシンポジウムに参加することは、日本が主導する新しい地域研究の国際化を促進する効果を持つ。

⑤ 若手研究者育成への貢献

総括班および4つの地域研究プロジェクトの各4拠点で合計17となる拠点到配置される拠点研

研究員は若手研究者を想定している。拠点研究員は自らの専門分野の研究を深める他、各拠点の研究事業の企画と実施、各種の国内/国際シンポジウムの運営等に携わり、国際的な場で研究実務を行ってゆく。このことは拠点研究員となる若手研究者のキャリアアップに直結する。拠点研究員は経験を積んで大学等の第一線の研究者として雇用されるため、中期目標期間中に交替を繰り返すことが予想される。第4期期間中に拠点研究員として雇用される若手研究者は数十人規模となり得る。このことを通じて次世代の地域研究を担う若手研究者の創出・育成に大いに貢献する。

また「グローバル地域研究」プログラムの各レベルで実施する研究会、セミナー、シンポジウムにはポストドクレベルを含む若手研究者の参加を積極的に求め、研究発表の機会を与える。プログラムの成果公開の一環として出版する論文集や各拠点で発行するワーキングペーパー等での論文執筆も奨励する。地域研究に関わる新しい魅力的な課題を設定し、日本内外の中堅以上の研究者と肩を並べて議論を行い研究発表する機会を設けることによって、すそ野の広い若手研究者の発掘・育成にも貢献する。

⑥ 達成目標

- (1) 「グローバル地域研究」という新たな地域研究の領域を開拓するために、理論枠や研究手法を提示する。
- (2) 新たな4つの地域研究領域にかかる研究推進のための国際的研究ネットワークを構築する。
- (3) 国際研究集会（ワークショップ、シンポジウム、フォーラムなど）を開催し研究成果の公開を促進するとともに、研究成果を積極的に国際的に発信する。
- (4) 大学間、あるいは大学と研究機関間の連携と情報共有を促進し、大学共同利用機関が有する研究資源を共同利用することで、大学の研究機能を高度化させる。
- (5) 研究拠点やネットワークにかかる関連機関と連携し、研究活動とその成果が関連大学院教育、学部等専門教育に活用され、この分野の教育の充実発展に寄与する。

⑦ 6年間のロードマップ

※ 主要な研究成果の発信（国際会議、成果物等）を中心に記載

年度	取組内容
令和4年度	<p>(総括班)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「グローバル地域研究」新領域開拓のための準備的研究集会を開催する。 ・各研究プロジェクト間に共通または境域する課題を研究推進するため方法を検討する。 <p>(各地域研究プロジェクト)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究プロジェクトに属する研究拠点による研究を推進（予備調査）する。 ・拠点間に通底するテーマによる問題意識と方向性を共有するために研究集会を開催する。 ・研究成果の公刊を随時行う。

令和5年度	<p>(総括班)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各研究プロジェクト間に共通または境域する課題の研究を推進する。 <p>(各地域研究プロジェクト)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究プロジェクトに属する各研究拠点による研究を推進（本調査）する。 ・研究プロジェクトに属する各研究拠点による国際的な研究集会を開催する。 ・拠点間教育及び連携研究を推進するとともに、国際的研究ネットワークの構築を開始する。 ・公開講演を実施することで研究広報を行う。 ・研究成果の公刊を随時行う。
令和6年度	<p>(総括班)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各研究プロジェクト間に共通または境域する課題の研究を推進するための中間的研究集会を開催する。 <p>(各地域研究プロジェクト)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究プロジェクトに属する各研究拠点による研究を推進（本調査）する。 ・研究プロジェクトに属する各研究拠点が共同で研究の中間的まとめとして研究成果の共用化と方法論的展開のために国際的な研究集会を開催する。 ・拠点間教育及び連携研究を推進するとともに、国際的研究ネットワークの構築を引き続き推進する。 ・公開講演を実施することで研究広報を行う。 ・研究成果の公刊を随時行う。
令和7年度	<p>(総括班)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各研究プロジェクト間に共通または境域する課題の研究を推進する。 <p>(各地域研究プロジェクト)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究プロジェクトに属する各研究拠点による研究を推進（本調査）する。 ・研究プロジェクトに属する各研究拠点による国際的な研究集会を開催する。 ・拠点間教育及び連携研究を推進するとともに、国際的研究ネットワークの構築を引き続き推進する。 ・公開講演を実施することで研究広報を行う。 ・研究成果の公刊を随時行う。
令和8年度	<p>(総括班)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各研究プロジェクト間に共通または境域する課題の研究を推進す

	<p>るための総合的研究集会を開催する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「グローバル地域研究」という新たな地域研究の領域を開拓するための理論枠や研究手法にかかる研究成果の取りまとめにかかる。(各地域研究プロジェクト) ・研究プロジェクトに属する各研究拠点による研究を推進（本調査）する。 ・研究プロジェクトに属する全研究拠点が共同で、構築された国際研究ネットワークを活用して研究成果をまとめるための国際的な研究集会を開催する。 ・拠点間教育及び連携研究を推進するとともに、国際的研究ネットワークの構築を引き続き推進する。 ・公開講演を実施することで研究広報を行う。 ・研究成果の公刊を随時行う。
令和9年度	<p>(総括班)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「グローバル地域研究」という新たな地域研究の領域を開拓するための理論枠や研究手法にかかる研究成果を発信する。(各地域研究プロジェクト) ・研究プロジェクトに属する各研究拠点による研究を推進（本調査）する。 ・研究プロジェクトに属する各研究拠点による研究成果をまとめる。 ・国際的研究ネットワークの構築を引き続き推進する。 ・公開シンポジウムによって研究成果を広く一般社会に還元する。 ・総括的な研究成果の公刊を行う。